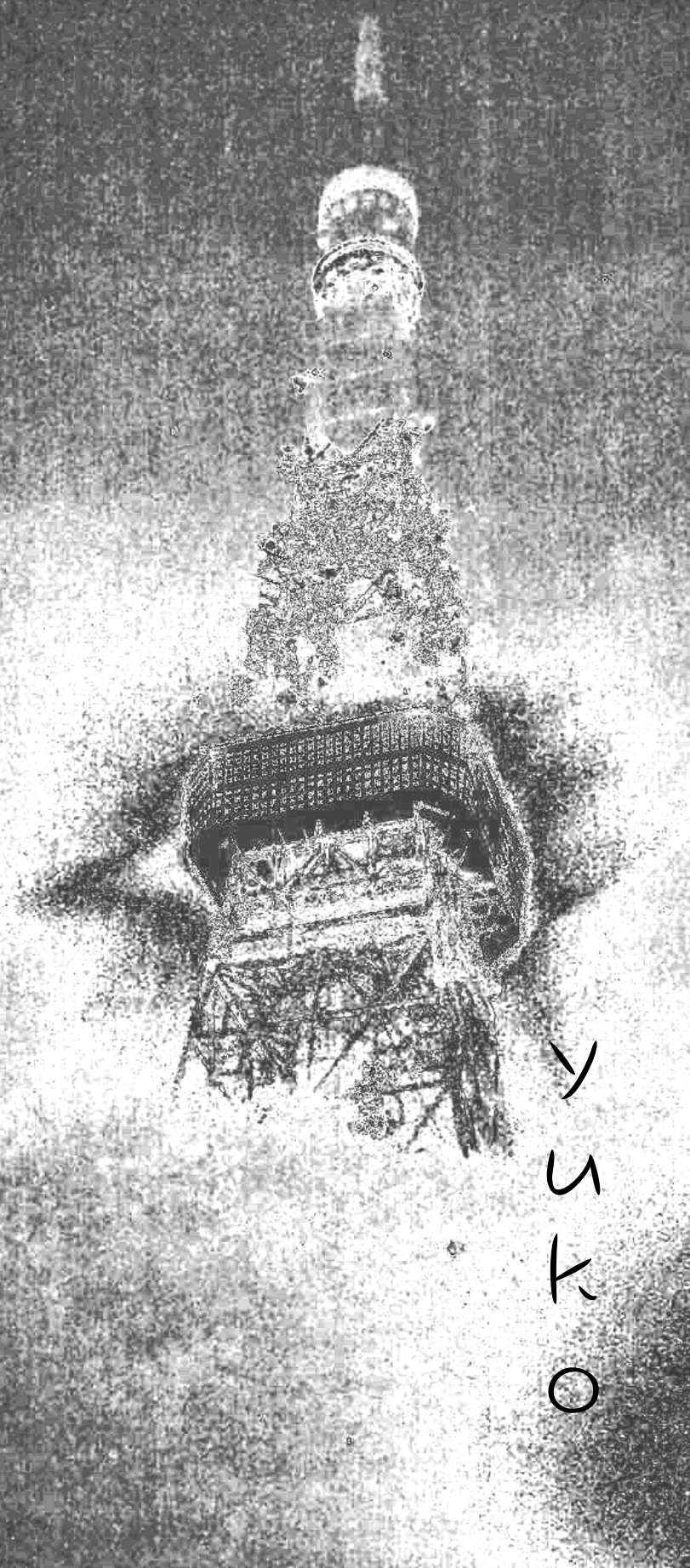


東京鬼ごっこ

後編

1570



「お父さん、元気にしてるの？」

「こちらに住み始めて初めての奈津子からの電話だ。

「ああ、元気だよ、そっちは相変わらずか？」

「ええ、皆変わりないわ」

皆の中には妻も含まれているのだろう。

「卓ちゃんが、お休み取って広島に行こうって言うの。今週末からそちらに行ってもいい？」

「いつまでも新婚気分の娘だ。私は苦笑しながら婿の気持ちをうれしく思った。

「そうか、楽しみに待っているよ」

「えっ……あら、そう……じゃ、卓ちゃんと相談してまた連絡するね」

「ああ、待ってる」
受話器を置くと元の静寂が広がったが、私は何となく浮き立つ思いで窓を開けた。

「本当なのよ……楽しみに待ってるって、そう言ったのよお父さん」

「そう、あなたは娘だもの、可愛いのよ やつぱり」

「そうかな……お父さん、何だか変わったみたい」

奈津子が卓也と二人で広島に行くと言う。

由梨子はそんな娘達の気持ちを思うと、胸が熱くなる。

自分がしている事は決して正しい事ではないのかもわからない。自分の心のままに動く事で、娘夫婦にも、そして夫にも、多大な迷惑をかけているのかもしれない。

「お父さん、何だか変わったみたい」

あの人が、どう変わったのだろうか。仕事最優先で、それ以外はまったく興味を示さなかったあの人が。

どんなに心を込めて料理しても、夜遅く帰ってきて、冷めたまま黙々と食べる夫。子供がどんな思いで志望校を受験したのか、知りもしないで、合格を告げた時、

「ああ、そうか」

と本を読みながらたつた一言答えた夫。

丹精こめた庭に何が咲こうが、玄関に何を飾ろうが、妻が何をしようが……まったく関心のない顔をしていたあの夫が、どう変わったのだろうか。

由梨子は信じられないというように頭を振り、制作途中のろくろに向かった。

自宅も兼ねた工房は由梨子の世界一色で、ここで陶器作りをしている時が一番幸せだと由梨子は思っている。

離婚に応じると言った夫が、仕事を辞め田舎で暮らし始めるなど、思いもよらなかった事だった。後は夫に送るだけで完了する離婚届をいまだに夫に送りつける事が出来ないでいるのは、何もかもを失った夫に対する負い目の様なものを感じるからだ。そういった事さえも、由梨子は夫のずるさのように思っていた。

初めての長期個展も二ヶ月後に迫っている。短い個展は何度か経験しているが、販売も兼ねた一カ月間の個展はそれなりの作品数も揃えなければいけないし、陶芸家としての技量も問われる個展になる為、気が抜けない。

普段使いのカップや茶碗の売れ行きもこのところ良くなっている。

収入もひとり暮らしを始めた頃から比べると、随分多くなっている。それを幸せな事だと思いつながらその心のどこかで、あの夫が田舎町でどんな風に暮らしているのかと考える時もある。自分のやつていることは本当に正しいのか・

そんな時由梨子はいつもあの時の事を思い出すようにしている。

由梨子が初めて陶芸家として、小さい記事ではあったが新聞に作品と共に掲載された日、いつものように夜遅く帰宅した夫は、ワクワクする思いでそれを告げた由梨子を見ようとせず、新聞記事を読もうとしなかった。そればかりか、

「そんな事ばかりにうつつをぬかして、お前はのんきでいいな」冷やかな目でそう言った。

何かが音をたてて崩れていった。彼なら・もっと私を見てくれただろう。もっと私を認めてくれただろう。はじめて忘れたはずの人を思い出した。

何よりも土を好きな人だった。少年のように焼き物の事を話す人だった。ほんの半年ほどの付き合いで突然に手の届かない所へ飛び立っていった人。

由梨子の手元に残ったのは、彼が文字通り命をかけて焼いた抹茶茶碗ひとつ。クロ―ゼットの奥にしまったままの箱を取り出してみた。鉄釉の少し赤も入った複雑な色合いの茶碗は、三十年近く経った今もその不思議な色合いのままだ。まるで彼の笑顔に再会したような安らぎを与えてくれる。その茶碗に後押しをされるように、あの夜、由梨子は夫との離婚を決意したのだ。三カ月後に結婚式を控えている娘には、青天の霹靂であつただろうが彼女なりに理解してくれた。結婚式のまさにその夜、由梨子はかねてもの思惑通り夫から独立した。

彼が生きていたなら、今ごろどんな陶芸家になつていただろうか。自分の焼き物の中に彼の色合いを見た時など、由梨子はいつもそう考える。

二人展のつもりでがんばるからね・ほろ苦い思いを口に出して、由梨子はろくろに向かい続けた。

ネットで購入したカップが届いた。割れないように一つ一つ丁寧に包装された包みを開くと、淡い色合いのカップが顔を出す。掌にのせてみると、作者の温もりさえ感じそうな、カップだ。

今更のように妻の陶芸家としての実力を見せ付けられたような気がする。

デスクの上に置いた猫の置物が殺風景な部屋に明るい。それを見ていると、妙に優しい気分になる自分がおかしかった。

「娘夫婦が遊びに来ると言うんだ。」

土を捏ねながら、晶子に話す。

「あら、いつ？」

「金曜日から休みを取つて来るらしい・まったく、のんきなヤツラだ」

「まあ、優しいお嬢さんじゃない、お父さんが心配なのよ、達夫さん、うれしいですよ？」

私は否定しなかった。確かに奈津子の気持ちは素直に嬉しかった。

「お茶にしません？」

香絵がコーヒ―を持って来てくれる。

「そういえば・加奈さんって祖父、母の籍に入っていたみたいなんです」

「えっ？ 本当ですか？」

「ええ、養女で・昭和三十二年に松江に転出されてるみたい」

「実はその当時家に奉公していた人達の住所録が残っていて、その中に美津さんの住所もあつたんです。」

「松江のですか？」

「そう・松江の・でもその住所にはもうどなたもいらつしやらないみたいなんです。」

「調べてみたのですか？」

「ええ、だって加奈さんは私の姉にあたるわけでしょう？出来れば会ってみたいし、叔父達のように他人事とは思えませんから」

「その住所教えてもらえますか？」

思いがけない展開だった。もちろん肉親の情から言えば香絵の気持ちは当然ではあるが、以外な事でもあった。

私の胸の奥のわだかまりがまた疼きだす。

香絵は手帳を取り出して、住所を書き写して差し出した。

一度松江まで行ってみよう。その住所を見ながら、私は漠然となにか大切な事を思い出しそうな、そんな思いを強く感じていた。

金曜日に娘夫婦がやってきて、一人暮らしのアパートは少しだけ華やいだ雰囲気になった。

「結構良い部屋じゃない、これなら泊まってあげられるわ」

「旅館を取るから、そちらに泊まりなさい。ここは狭すぎる」

「あら、いいじゃないですか」

1LDKでは実際私も気詰まりだ。婿は尚の事だろう。私は三矢に部屋を頼んだ。

「わかったわ、でも今夜の食事は私が作ってあげる、いいでしょ？お父さん」

自炊には大分慣れてきていたが、娘の気持ちはありがたかった。

冷蔵庫の中身を点検して、手早く料理を作り始めた奈津子の後姿は、妻のそれに良く似ている。

料理も妻の味付けを忠実に守っており、私にとっては嬉しい感動であった。

「コーヒーは父さんがいれよう」

私は胸が熱くなるのを隠すように、言った。

「あら……このカップ」

「これ、お義母さんのだよね」

「ああ、ネットだね、買ったんだ」

「ネットで……そうなんだ……」

奈津子達が三矢に引き揚げると、一人暮らしの静寂が私を包む。

忘れていたはずの、淋しい……という感情に、眠れない夜が過ぎていった。

翌日、早めに奈津子達はやってきた、夕食同様に朝食の仕度をして、ざっと部屋の掃除をしてくれる奈津子は、仕事も話し方も妻とよく似ている。

こんな事にさえ、今頃気付くなんて……自分の家庭に対する考えの間違いを、改めて思い知らされた。

「さて、今日はどうしようか？」

「お父さんの、生まれた町のお薦めを歩いてみたいわ」

奈津子の意見で、まず、この町を散策する事になった。

町と言っても、田舎の小さな村だった所だ。それほどの名所があるわけではなかったが、折りから新緑の季節で、自然だけは自慢できる町である。

「空気がおいしいわね」

深呼吸しながら奈津子が言う。

唯一の親戚である叔母のところへは、こちらへ帰ってくる事に決めた時、挨拶には行っているが、今回奈津子達を伴って、再度親子ともどもの不義理を詫びた。叔母は奈津子を見るなり、私の母に良く似ていると目を潤ませ、奈津子もはじめて会う大叔母に、感慨深いのか、うつすらと涙をうかべている。血の繋がりとはいくうものなのだ……私は自分に血を繋いでくれている祖先に対して自然と頭の下がる思いでいた。

「清神社、つて清いつて書いて、すがと読ますのね。すがじんじゃ……良い名前ね」

「毛利元就の事は知っているけれど、こんな所に元就ゆかりの人達の墓があるとは知らなかったです」

卓也も興味深い面持ちで苦むした墓石を眺めている。

「お杉の方って知っているか？」

「ええ、元就の育ての母親ですよ」

少し離れた民家の玄関脇にある小さな墓碑が、お杉の方の墓だと教えてやると、歴史に少し興味があるという卓也は驚いて、カメラのシャッターを切っている。

「こんな些細な事が妙に嬉しい。」

お昼は「しんぐう」に連れて行き、ここでまた私の株はひとつ上がったようだ。

料理も器も奈津子達の満足の対象になり、こういう店を私が知っているという事も、奈津子にとっては驚きだと言う。

「なんだか、お父さんのイメージ変わっちゃうなあ」

「イメージ？」

「うん、仕事以外の事には、まったく興味のない人って感じだったもの」

「そうか……」

さらに、料理を運んできた史朗と焼き物の話をする私を奈津子達は不思議なものをを見る様に眺めている。

「うっそお……お父さん焼き物してるの？」

史朗が奥に入ったあと奈津子が驚きを口にする。

「ああ……ちよつとな……」

「それって、お母さんの為？」

「いや、でも……母さんの気持ちも、少しは解るような気がするよ」

奈津子との距離がまた少し近くなったようだ。

三矢への帰り「安芸野」に立ち寄り、窯出した私の器をめぐって、香絵と奈津子は女同士で打ち解けている。

夜は三矢で喜一や稔も交えての夕食となり、晶子の心づくしの郷土料理と地酒に、久しぶりの和やかな楽しいひと時を過ごした。

「もう少しお休み取れば良かったわ、こんなに楽しいんだったら」

日曜日の昼過ぎにはこちらを出るといふ奈津子は残念そう。

「またゆつくりと来ればいい。飛行機だとあつと言う間なんだから」

「本当に、不思議ね……」

「え……？」

「何だか、ここにいると気持ちがどどんピュアになるっていうか、些細な事でおたおたするのがばかばかしくなっちゃう。お父さんが変わっちゃったのもわかる気がするなあ」

私は思わず笑った。

「そうか、そんなに変わったか？」

「うん。でもね、もしかしたら、お父さんはずっと今のお父さんだったのに、私達がそういう目で見てきたのかもわからない。突っ走らなければダメな社会だものね、東京は……」

東京は……

仕事はどうしてるの？」

「ああ、ぼちぼちやってるよ、大丈夫、まだまだお前建の世話にはならないから、心配するな」

翌日夕方まで市内を散策し、二人は帰って行った。

淋しさよりも、娘との時間の中で再確認した家族の温かさ、そして、何よりもあの頃の自分の姿を思い返す事によつての自責の念が私を襲う。

明け方私はまたあの夢を見た。加奈の手だ。小さい白い手……

「加奈……」

私は思わず手を差し伸べる。あと少し……届かない加奈の手がずっと暗い穴に吸い込まれていく。

目覚めた後もその小さな手が纏わりついて来るような、妙な感覚がかすかに残る。

きつと何かある。忘れてはいけない何かを私は忘れてる。
一度松江に行ってみよう。窓を開けると、早くも爽やかな初夏の日差しが差し込んでくる。

「こんな事って…あの人が焼き物だなんて」

奈津子がお土産と一緒に持ち帰った一枚の皿を、もう一度取り出してみる。

完成されてはいないけれど、色合いや形に個性があり、年若い初々しささえ感じられる。

これを本当に夫が焼いたのなら、私の今までは何だったのかしら…

由梨子は少し悔しい思いで、その皿を見つめた。若い頃、一緒に陶芸を勉強した彼の技法にどこことなく似ている。男らしい力強さとやわらかなおおらかさの両方を併せ持っている皿だ。

「お父さんったら、お母さんのカップ、ネットで買ってるのよ。はら、あの猫の置物も・・・」

奈津子はすでに父親の手に落ちている。広島がよほど楽しかったらしく、一気にしやべりまくって帰って行った。

「一度お母さんも行ってみるといいわ。お父さんに対する気持ち、変わるわよきつと・・・」

そんなに急に変わるものなら、最初からこんな事考えたりしない。

「とにかく、変わったのお父さん。ううん、私達の方がお父さんを色眼鏡で見ているのかもわからない。とにかくもう一度話し合ってみれば？その上で決めたら遅くないと思うわ」

夫は、故郷で一杯の自然に囲まれ、そして気の合った友達に支えられて、充実した日々を送っているという。それは由梨子にとって、まさに予想だにできなかった事ではあったが、それが本当ならば、夫の為に喜ばなければいけない。

由梨子はまた、しまつてあるあの抹茶茶碗を取り出し、夫の皿と並べて見る。やっぱりどこか似ている…不意に熱いものがこみ上げてきて、それらがぼやけて見えた。

「やだわ、何泣いてるのかしら・・・」

悲しい訳でもなく、嬉しい訳でもなく、ただ涙が止まらなかった。夫が焼いた皿の温かさが由梨子の心を少し柔らかくしていた。

知り合った頃、プロポーズされた日、結婚式の事、奈津子が生まれた日の事、忘れていた日の事が次々と思い出される。

「だから・・・どうするっていうの？今更・・・」

由梨子は、今度は口に出して独りごちた。いまさら夫に会って、どうするっていうのだ。

ろくろの前に座り、一心に土に向かう。後悔なんかしない…由梨子は唇を噛み締めた。

松江は何年ぶりだろう、仕事からみで出雲へ来たのは十年くらい前だろうか。あの時は慌しく通り過ぎただけだが、古い町並みそのまま残る通りは、しっとりとして落ち着いていて、怖れに近い思いで車を走らせた私はいささか拍子抜けした気分である。

美津の家は松江城下の武家屋敷の並ぶ一画、小泉八雲記念館にも程近い場所にあった。元は武家屋敷に奉公していた人達の為の民家とも思われる、こじんまりとした古い家だ。私は思い切つて、玄関横のチャイムを鳴らしてみた。人が住んでいるかどうか分からないが、何の物音もしない。隣の家から老女が顔を出し、「そこは空家ですよ」と教えてくれた。

老女に「高梨」という人が住んでいたかどうか聞くと、確かにそこは元、高梨さんの家だったと言う。

「美津さんをご存知ではありませんか？」

「美津？あんたさん、みっちゃんの知り合いね」

「ええ、美津さんというより、美津さんのお子さんの友達で…」

「ほうね、みっちゃんの息子の…みっちゃんは元気にしとるんじやろか」

「え…？」

この家には美津が母親と住んでいたが、広島から戻ってきてすぐに縁談話がまつまり米子へ嫁ぎ、後は母親だけが住んでいた。その母親も七年前に亡くなり、それ以来この家は空家になっているという。

「広島から加奈という女の子を連れて帰りませんでしたか？」

「加奈？いや、聞いたことないがね…」

米子の嫁ぎ先を訪ねると、老女は少し警戒した目になり言い渋っていたが、米子の皆生温泉の近くで弓ヶ浜緋の織り元だと教えてくれた。

どういう事なんだ。米子までの道を行きながら、恐ろしい予感に潰されそうになる。その日は米子の皆生温泉に宿を取るつもりだ。もうすっかり日が暮れた頃、やっと米子に着き、温泉街には珍しい、ビジネスホテルに落ち着いた。

シャワーを浴び、ベッドに入ったが、どうしても寝付けない。目を閉じると、加奈のあの白い洋服とおかつば頭が…そしてあの白い小さな手が暗闇から自分を呼んでいるような気がして、私は何度も寝返りを打った。加奈はいつたい何処へ消えてしまったのだろうか。

あの日、加奈と私の間に何か…とてつもなく恐ろしい何かがあったに違いない。漠然とした恐怖が、また私を襲う。

皆生温泉の朝は早い。どこかで一番鶏が鳴いている。明け方うとうとしただけの私は、もやのかかったような頭に、濃い目のコーヒーで湯を入れる。

早めにチェックアウトし、弓ヶ浜緋を織っている人はいないかフロントで尋ねると、町役場の観光課で訊ねると解るのでは。と教えてくれた。

観光課では人の良さそうな小柄な職員が、弓ヶ浜緋についていろいろと親切に教えてくれる。今ではほとんど機械織りで、それでも年間一百万反程の生産だという。弓ヶ浜緋を扱っている場所を何か所かメモして、役場を後にした。港町特有の潮の匂いが体の芯までしみこみそうな町のはずれのみやげ物屋にも弓ヶ浜緋と称した、コースターやテーブルセンターなどが置いてある。それらを土産に買い求め、店番をしている女性に役場で聞いた会社の所在地を聞き出す。まるで探偵になったようだ。・からみあつた糸が少しずつ解れて行く。その先に何があるのか、それは考えずに今はただそれを解きほぐす事だけに専念しようと思う。

教えられた会社は古い小さな民家を改造したような事務所で、隣にはやはり古いさな古い工場を備えた会社だった、中に入つて、弓ヶ浜緋を織っている人を探していると伝えると

応対に出た事務の女性が「社長ならわかるかも…」と奥の部屋に用件を伝えるに消え

すぐに、私と同年配の男性を伴つて戻つて来た。

弓ヶ浜織りを生業にしている家は、この頃はまったく無いですよ…と言いながら、私を見て、

「どなたを探しておられるのですか？」

と聞く。

私は結婚後の苗字はわからないが、「美津」という七十代の女性を探していると話した。

「苗字がわからないのでは、難しいですね…安田さんの所で聞いて見られると、解るかもしれないが…」

弓ヶ浜織りを伝承しているという「安田みや」の家は隣町との事だが、車で十分ほどだという。

私は礼を言い、すぐに安田みやの家に向かった。

酒屋を見つけて、「弓ヶ浜餅を織っている、安田さんの家を・・・」と言うと、即座に教えてくれた。

古い造りではあるが、かなり広い屋敷は、昔の権力を物語るような門構えだ。門は開いており、玄關のチャイムを鳴らすと、若い女性が顔を出す。

「安田みやさんはいらつしやいませんか？」

「おばあちゃんですか？ ああ・・・何か？」

「弓ヶ浜餅を織っていた人で、七十過ぎの美津という名前の人をご存知ないか。お聞きしたいのですが」

「美津さん・・・苗字はわからないのですか？ ちょっと聞いてきます。お待ちください」

女性は奥に引つ込み、しばらく私は一人になった。

やがて女性が戻ってきた。

「お待たせしました、祖母はもう寝たきりになっていますので、お会いできませんが、美津というのは浜野美津さんの事ではないかと言っております」

「浜野さんですか、どちらにお住まいかはわかりませんか？」

「浜野さんなら、息子さんと一緒ににお住まいで、ほら・・・あの赤い煉瓦の屋根の家ですよ、ただ・・・もう浜餅はやつてらつしやいませんけれど」

「助かりました。どうもありがとうございます。みやさんにも宜しくお伝えください」

あと少しで目指す美津に会える・・・だが、その美津の口から、加奈の事がどのように語られるのか、それを考えると怖くもある。

勇んで宮田家を出た私は、恐れを振り払いながらゆっくりと美津の家に向かった。

浜野という表札の家はこの辺りに多くある赤煉瓦にベージュの壁の二階建てで小さいながらも庭も手入れが行き届いていて、住む人の人柄を現すように、薄桃色

の花がそこそこに咲いている。

インターホンを押す。少しの時間の後インターホン越しに「はい」と女性の声に応えた。

「不躰で申し訳ありません、私は山村と申しますが、浜野美津さんはご在宅でしょうか」

「美津は私ですが、山村さんと申しますと」

「あ・・・以前広島にいらつしやつた高梨美津さんですよ」

「・・・」

「どうしてもお聞きしたい事があるのです。お会いいただけませんか」

「お待ちください」

ややあって、ドアが開けられた。小柄な人だ。苦労の後はうかがえるが、細い身体に品の良い袖をきりりと着こなしている。若い頃はきっと美しい人だったことだろう。

そういえば・・・私はこの人に何度も会っている。この人こそ、間違いない加奈の母親だ。

私は確信した。

「新宮さんの所にいらした美津さんですね」

美津は一瞬怯えた目で見たが、かすかに頷いた。

「私は加奈さんと良く遊んでいた、山村です。達夫です」

「ああ・・・達夫ちゃん・・・まあ、りっぱになられて・・・いったいどうして？」

家にいるのは美津一人で、それは好都合でもあった。

リビングに通され、温かいお茶で一息ついた私は、さっそく本題にうつる。

「美津さん、お子さんは・・・？」

「はい、息子が二人、今は長男と一緒に住んどります。あ・・・新宮さんでは・・・加奈、加奈さんもお元気でしょうか？」

「ええ、お元気ですよ。今は遠くにおられますが…」
私は思わずそう答えた。

加奈はあの日、美津と一緒に行ったのではないのだ。それがはつきりと解った。今更この人を苦しめる事は出来なかった。

「ただ…美津さん、加奈さんはあなたが本当のお母さんである事を、知っています。どうしてもいきさつをお聞きしたいと、それで私がかわりに来たのです。話してくださいませんか？」

「加奈が…そうですか…確かに、私は加奈を産みました。でも、ただ産んだだけで、やはり母親は、あの子を育てて下さった、若奥様なのです。そう伝えて下さい。私は母親なんかじゃない…」

「何故、加奈さんを置いて、出て行かれたのですか？」

「何故…？辛かったからです。あの子を産んで、あの家で暮らした七年間は地獄でした。すぐ近くに愛した人とお腹を痛めた子がいるのに…私もまだ若かった。辛くて辛くて、毎晩泣き暮らしたものです。すぐにでもあそこを逃げ出したかった。何もかも忘れて、やり直したかった」

「でも、あなたは新宮家に残った」

「父親が…借金をしとつたですよ。新宮の大旦那様に…それをお返しするまでは、私は働かなきゃいけないからです。あの子がお腹にいるとき、大奥様からも始末するように言われたです。でも…それはどうしても出来なかった。あの子はもう、お腹の中で小さな手足を動かしてましたよ。愛しかったです…産むのなら、産み落とした時点でもう、親子の縁は切らなきゃいけないと言われました。私はそれでも良いと思いました。でも…坊ちゃんまが結婚され、若奥様が加奈を抱く姿を見るたびに、私は…」

美津は遠い日を思い出したのか、目に涙を浮かべた。

「松江に帰られる日、加奈さんを連れて行くとは思わなかったのですか？」

私は核心にふれた。

「そりゃあ、連れて帰れたかったです。でも…私ん所は貧しくて、加奈にとつてどちらが幸せなのかを考えれば、答えは決まっとりました」

「加奈さんは、あなたが母親だと、その時はもう知っていたのではないのでしょうか？」

「そうかも知れません。あの日、私を追いかけてきて一緒に行くと言ったのです。美津さんは加奈のお母さん？と聞きました。誰がそう言ったのか聞くと、お母ちゃん…」

「それで…？」

「もちろん、そんなの嘘だつて、美津はお母さんじゃない、これから良い人と結婚して可愛い赤ちゃんを産むんだよ…加奈ちゃんがいると美津は困るつて言いました」

「それで…加奈は何か言いましたか？」

「そのまま、私は振り返らずにどんどん駅に向かって走りました。しばらく走って振り返ると、後ろ向きにあの子の姿が見えました。後ろで結んだ白いリボンが今でも目に焼きついています」

美津は疲れたように目を閉じた。ちようどその時、玄関の開く音がした。

「ただいま、あ…お客様？」

高校生だろうか、制服姿の女の子が人懐こい笑顔を向ける。

「ばあちゃんの昔のお友達の息子さん、ご挨拶せんね」

「こんにちは」

色の白い可愛い子だ。やはり何処となく美津に似ている。

「孫の加奈子です。今年から高校生なのに、いつまでも子供で…」

どたどたと二階へ上がっていく孫娘を見送りながら美津が言う。

「加奈子ちゃん…ですか」

「ええ、初めての女の孫なもので、あの子の名前を…」

美津の気持ち痛みほどわかった。

「加奈さんも喜ぶでしょう…」

加奈はやはり美津とは帰っていないかった。それが何を意味するのか・暗澹とした思いで私は美津の家を出た。

車を走らせていると、加奈への思いがどんどん強くなっていく。

新宮の家にも美津の元にも加奈の姿はない・加奈の置かれている状況が悲観的なものである事が、私の気持ちを暗くする。

もう少しで家に着くという所で、携帯がなる。あわてて車を止めて見ると、見慣れない番号だ。

「はい」

「あ・私です」

妻の声だ。

「え・由梨子か？どうした？」

「今だいしようぶ？」

「車運転中だが、急用かい？」

「あ、いいえ、じゃあまた電話します」

「いや・こちからかけるよ、番号ここにいいんだね」

久しぶりに聞く妻の声はまるで若い頃のように、私の耳に優しく響いた。

長時間車を運転したせいか、頭の芯が熱を帯びたように重い。それ以上に重い身体を引き摺って部屋に入るとすぐに、私は妻に電話をかけた。

「ごめんなさい、急に・奈津子から聞いたの、元気そうね」

「そちらはどうなんだ・元気にやってるのか？」

「ええ・何とか。今度個展をやるの、それでバタバタしてる」

「そうか・すごいな、すっかり有名人だ」

「あ・あなたのお皿、いいじゃない。温かい感じがよく出てる」

奈津子がどうしても、と勝手に持っていた皿だと、言い訳した。

妻の声はとげとげしさが消え、以前の柔らかな優しい声だ。私は微妙な関係である事を忘れかけていた。

「一度、こちらに来ないか？」

妻の声が一瞬詰まる。ああ、そうか・私達は別れる事に決めた夫婦ではないか。今更こんな事言い出すなんて、どうかしている。

「あ・ごめん、いいんだ・うっかりしていた。君はもう別の場所を持っているんだった」

「ううん、私の居場所なんか。ないの・そんな風に思いたくないけれど、帰る場所がない・近頃そう思うの、何て勝手なんだと、自分でも嫌になるけれど…」

「疲れているんじゃないのか？あんまり無理するなよ、ここで良ければ、いつでも帰ってくればいい、待っているから」

自分でも驚くほど素直な言葉が口をついて出てくる。

その気持ちは電話を切ったあと、私の中で新たな淋しさに変わっていく。

一人はやはり淋しい。私は心底そう思った。

明け方また夢を見た。

(たつちゃん、うちを殺してくれん?)

茶色がかつた瞳がのぞきこむ、

(なんで、かなを殺さなきゃいけないのん?)

(たつちゃん、うちの事好き?)

(うん、好きじゃ)

(うちには帰るところがないん、うちはいなくなつたほうがええんよ)

(誰にもゆうちやいけんよ、うちがここに居る事、だれにもゆうちやいけんよ)

(こつて・かな、ど?)

繋いでいた手が離される。暗い穴の中に小さな手が吸い込まれていく、白い小さな

「加奈！」

全身から汗が噴出ししている。夢の出来事が、はつきりとした形になって、私を襲う。

井戸だ・・・

そうだ、あの日、あれは東京鬼ごっこの中だった。加奈は私に言ったのだ。

自分がいてはみんなが嫌な思いをする。お母ちゃんも、お父ちゃんも、おばあちゃんも、本当のお母ちゃんも・母親は加奈に本当の母と一緒に行く様に言い、あんなにいと迷惑じゃと突き放し、本当の母である美津と一緒に来られては邪魔になると言った。今思うとどちらも優しい気持ちから出た嘘であつたのだろう。だが、加奈にとってはそれは孤立を意味した。自分の居場所が無くなったと思つた加奈の選んだ道は、自分を抹殺する事だつた。

加奈に手を引かれて、あの井戸の所へ連れて行かれた。

加奈はここから自分を突き落とす様私に言った。私は出来ないと言つたのだ。そんな事出来ない・・・

「それじゃあ、この事は誰にも言わんで、ぜつたいに・・・指切りじゃけんね」

たつた七才の子供が下した、哀しい結末だつた。

あの日実の母親と一緒に行かせてやろうと決めた育ての母が、加奈の為に作つた、真っ白いよそ行きのワンピースを着て、加奈はたつた七年の人生を閉じたのだ。

暗い井戸の底に吸い込まれるように落ちていった加奈を助ける事も出来ず、ただ呆然と見ていた私は、その後どうやって家に帰つたかも覚えていない。

誰にも言わんで・・・と言つた加奈の言葉を守らなくてはならない・・・私はひたすらに加奈の事を忘れようとした。加奈の死を目の当たりにしたショックも加勢して、私の記憶からは加奈の事はまるで消しゴムで消し去つたように消えてしまった。

加奈は四十七年の間たつたひとりであり、あの暗い穴の中にいたのだ。すぐに誰かを呼び

にいつていたら、あの穴の中から加奈を救い出せたかもしれない。

私は言いようのない悲しみと共に激しく自分を責めた。どれだけ後悔しても、今となつてはどうする事も出来ない。

「加奈・・・」

空が明るくなり始めている。あの井戸を探さなければ・・・私は部屋を出て、記憶を頼りに走つた。酒屋の角を曲がった、公園の隅にその井戸はあつたのだ。こんなに近いところに

公園の隅の井戸はもう埋め立てられて、そのあたり一面に紫陽花が咲き乱れている。

これから色を変えようとする、紫陽花の緑がかつた色が、幼いままの加奈に重なつて

私は嗚咽した。

(たつちゃん・・・うちがここにいる事は、だれにも言わんで・・・)

また、加奈の声が聞こえる。

それが加奈の最後の言葉だつた。誰も悲しませたくなかつた。自分がいなくなる事が、最良だと加奈は考え、実際にまわりの人達は加奈が消えた事で加奈が幸せになつたと信じた。

今更、この事を誰に告げる・・・私ははつきりと思ひ出した。加奈の大きな茶色い目、ふつくりと形の良い唇、透き通るように白い肌。

(加奈・・・ごめん。今頃思ひ出すなんて・・・)

加奈がゆつくりと笑つて言った。誰にも言わなくていいよ・・・

私はその後考えた末に、加奈の事は誰にも話すまいと決めた。時折井戸のあつた場所に行つては、加奈といろいろ話をしたり、時には花を供えたりしたが、そこに加奈が眠っている事は、加奈と約束した通り、自分の胸の中だけにしまいこんだ。

11 それっきりおかつぱ頭の加奈が、夢に出る事はなくなった。

秋の風が心地よく吹いている。安芸野の庭には萩の花が零れるように咲いている。私は本格的にカップの製作を始めた。土を捏ねていると、無心になった、

「達夫さん、一息入れたら？」

香絵の入れてくれたお茶を飲みほし、私は庭に出て深呼吸する。

バス停からの一本道を誰か人が歩いてくる。だんだん近づいてくるその人に気がつき私は大きく手を振った。はにかむように笑顔を返した妻の口が(きちちゃった・)とつぶやくのがわかった。

今度は大きく頷きながら、彼女をもう一度捕まえる為に私は坂道を走り降りていった。

—了—

あとがき

拙い文章は読み返すたびに冷や汗もので、でも、こんな拙い小説を快く活字にしてくださいとDGの皆様は感謝の気持ちでいっぱいです。

「東京鬼ごっこ」は七、八年前、友達と話している時の会話の中で出たもので、懐かしいこの遊びの題名と、おかつぱ頭の女の子、この二つだけを決めて書き始めたものでした。

途中何年も手付かずになってしまっていて、まさかこうやって物語を完結出来るなんて、思ってもいませんでした。簡単にも書きになりたい・なんて豪語していましたが、自分では長編と思っていたものが、活字になって印刷されると、ほんの短い、短編小説でしかないことも改めて思い知りました。本当に恥ずかしさに穴があいたら・・・の心境です。

最後まで読んでいただいた、我慢強い皆様に心よりお礼申し上げます。

yuko